

歌い継がれるふるさと

侍従川讃歌の誕生秘話

侍従川讃歌

作詞 廣瀬 一雄
補作 廣瀬 隆夫
作曲 高橋 揚一

一、
緑深き朝比奈の
こけむす谷間若水に
わき出る清き流れあり
名にしおう若水川
若水川から侍従川
流れ流れて杉の先
大道耕地を見渡せば
大堰近く水ぬるむ

二、
大水の谷戸を右に見て
川間流れ明堂橋
諏訪の橋から侍従橋
並木観音おわします
高橋過ぎて三艘へ
あし原抜け高谷の里
内川橋を越えたなら
夕日にはえる平潟湾
侍従とうとうと流れ
歴史を刻むふるさとは
照手の夢を語り継ぐ
永遠の流れよ

侍従川 朝比奈峠～大道～六浦～平潟湾



WAKINOYATO

■ 都会の川に生き物が戻った

金沢区の南部を横切るように、一本の川が流れています。かつて鎌倉へ塩を運んだ道として知られる朝夷奈切通が源流です。その湧き水を集め、二キロあまり先の平潟湾へと注ぐ侍従川です。古くから照手姫伝説が語り継がれ、地域の人たちの記憶とともに静かに流れ続けてきた川です。

侍従川は、大道一带に広がっていた田んぼに水を供給する清らかな川でした。子どもたちにとっては格好の遊び場でした。しかし高度経済成長期、人口の急増と共に生活用水が流入して水質が悪化し汚染が進みました。そんな中、川の中流域で「昔の清流を取り戻そう」と、大道小学校の先生や子どもたち、PTA、地域の皆さんが中心となり、川のクリーンアップが始まりました。植物の力で水を浄化しようとアシやマコモも植えられました。こうした地道な取り組みで侍従川は少しずつ本来の姿を取り戻していきました。

平成8（1996）年、NHK がその歩みを取材し、「都会の川に生き物たちが戻った」という番組が放映されました。画面越しに映し出された、再び生き物の姿が見られる川に、多くの人が心を動かされました。川を変えたのは、行政や大きな重機ではありません。「侍従川を、昔のように子どもたちが遊べる清流に戻したい」という地元の人たちの素朴な願いでした。侍従川は見事に清流を取り戻したのです。



NHK の取材風景



NHK の番組の Youtube



清流に戻った現在の侍従川



カルガモとアユ

■ 侍従川讃歌の詩との出会い

大正12年生まれの父は、少年期を清流だった侍従川で過ごしました。夏は蛍狩り、秋になるとハゼを釣ったり、ウナギをとったりして遊んでいたようです。晩年は、時間があると、きれいになった侍従川のカルガモなどの生き物を楽しそうに見て過ごしていました。父は平成11（1999）年の暮れに亡くなりました。

父の遺品を整理していましたが、昔の侍従川の地図とその頃の思い出を綴った「侍従川の思い出」という筆書きの文章が出てきました。その裏に、侍従川讃歌という詩が書いてありました。

この詩は、長い間、そのままになっていましたが、町内のホームページに掲載したところ、近隣の自治会の会長から曲を付けたらどうかという提案がありました。会長も侍従川の生き物が好きで飛来する野鳥や海から上ってくる魚の写真を撮っている方でした。

■ 侍従川讃歌プロジェクト

そこで、横須賀高校の先輩である高橋揚一さんに作曲をお願いしました。父の詩は五番までありましたが、歌として整え二番に凝縮し、最後のサビとなる部分の歌詞を新たに加えました。写真も添えて **YouTube** で公開しました。

高橋克実さんにプロデュースをお願いし、ご紹介いただいた追浜高校ご出身で金沢区在住のソプラノ歌手・松永知史さんに歌っていただけることになりました。さらに、編曲とピアノ伴奏は柴田悦子さんが担当してくださいました。偶然にも柴田さんのご主人は、当時大道小学校に赴任されていて、侍従川のクリーンアップ活動に参加されていた先生でした。不思議なご縁が重なりました。

その後、追浜高校ご出身の秋元さんのお力添えで、「青春かながわ校歌祭」の課題曲に選んでいただき私たちも壇上で歌わせていただきました。多くの方々の力が結びつき、侍従川讃歌はようやく日の目を見ることができました。追浜高校と横須賀高校の友好の橋渡しができました。



【侍従川讃歌】

一、 緑深き朝比奈の こけむす谷間若水に わき出る清き流れ
あり 名にしおう若水川
若水川から侍従川 流れ流れて杉の先 大道耕地を見渡せば
大堰近く水ぬるむ

二、 大水の谷戸を右に見て 川間流れ明堂橋 諏訪の橋から
侍従橋 並木観音おわします
高橋過ぎて三艘へ あし原抜け高谷の里 内川橋を越えたなら
夕日にはえる平潟湾

侍従とうとうと流れ 歴史を刻むふるさとは 照手の夢を語り継ぐ
永遠の流れよ

・作詞: 廣瀬一雄 補作: 廣瀬隆夫 作曲: 高橋揚一 企画: 高橋克己
・歌: 松永知史 編曲・伴奏: 柴田悦子



侍従川讃歌の Youtube

※ 解説

- ・侍従川の上流は若水川と呼ばれていました。
- ・大堰とは田んぼに水を入れるために川を堰き止めて出来た貯水池です。
- ・里山と侍従川の間の土地は川間と呼ばれていました。
- ・並木観音が祀られた神社からは金沢八景が一望できました。

【添付資料】

待従川 讃歌

作詞 広瀬一雄

一 緑り深き朝暮奈の
二 河をすしう若水に
ゆき出る清き流れあり
つたえ語りし若水川

三 若水門をこえ行けば
待従の清流杉のりき
大堤新地を見渡せば
大堰近く水ぬるむ

四 大水谷戸を右に見て
川間をくぐり明堂橋
諏訪の橋から待従橋
並木天神 おゆします

五 大が橋過ぎて三艘へ
あゝ原板けりて高各郷
内川橋も近くなり
夕日にはえう平潟湾

六 待従の清流とうとうと
一丈もきで清流は
今も昔もまわりなく
清き流れよこしえに

待従川の思ひ出

朝比奈峠も水源として金谷村も縦断し川村・三艘村を通り
平潟湾に注ぐ清流が待従川である。その昔「するて姫」と言う
お姫様が居てその乳母に待従と言う人が居て、誤があつてこの乳母
がこの川に身を投げたが幸ひ死なずに助かつてゐる。姫は太妻宮
んで川の名も待従川と呼んだと言ふ伝説がある。この川は水が清
く水の絶えたことがなくお陰で大堤村は大妻堂かな村であつた。
そこで相川(今鎌倉)と武川(今沢)との間で肥えた土地争ひが絶えず
この問題を解決するにためた自井穴で地蔵が造られたと言ふ伝
えられている。この川はゆるうゆと曲りぬり自然の水の流れそのままの姿をし
両側には大木竹が生繁り一目で川であることがわかる。

川間のネコ柳が白銀色の草を吹く頃になると待従川に春が来る。川の上手
にはツクシタンボク・スミレ・レンドナズナなど色とり野草がおおわれる。
川岸の竹藪ではウグイスが鳴きセキレイ・カワセミ・カワラバ・カオジが飛び交ひ
春鳥ではヒバリが鳴く。6月になると田んぼに水を入れるため大堰が作ら
れる。この頃から川の水が減つて子供達りの遊びの時期となる。大堰の
下の水溜りにはエビ・フナ・ハヤが沢山いて子供達はわね先に網で採る
川の清流ではかき堀りが始まる。これは水も堰止めで中の水も出て魚も採
る方法で子ぎとじょうがよく採れる。7月にはまた過ぎ夏祭りガ
近づく頃夜の岸で螢狩りが始まる夜露で足がびしょりになる。
8月・末頃大池の水が抜かれる。池の中にはコイ・ウナギが一杯いて人々
も子供も夢中になつて採る。これは二年一度の年中行事である。

秋になると水が不用になると大堰が開けられ放水する。水の少なくなった
つた川ではつたき釣りが行われる。

10月頃大潮になると諏訪の橋の上でハセ釣りが行われる。ハセケ
値のハセがよく釣れる。このハセは竹串に差して焼くお正月のユツ巻き
用として保存する。ケンケンカ文(黒鯛の子)や白魚も海から
上る来る。

秋も深まつて霜降りも終る頃雑木林に北風が吹き抜ける頃
川岸には霜柱が立ち川面は薄氷ににおおわれて待従川
も冬に度々に入る。平成9年7月7日 広瀬一雄

久良岐郡六浦荘村字三分大道之図

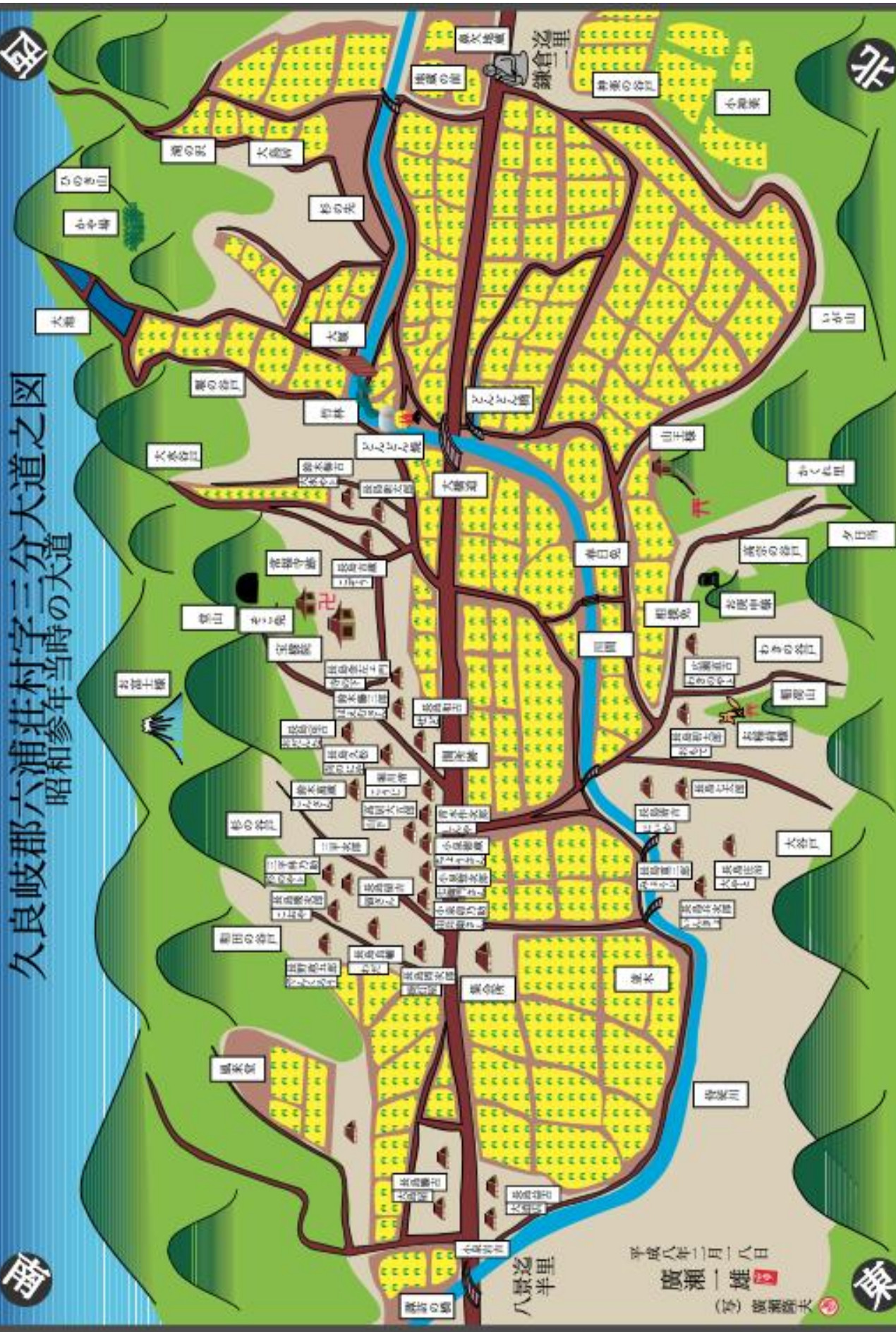
昭和参年当時の大道

全

北

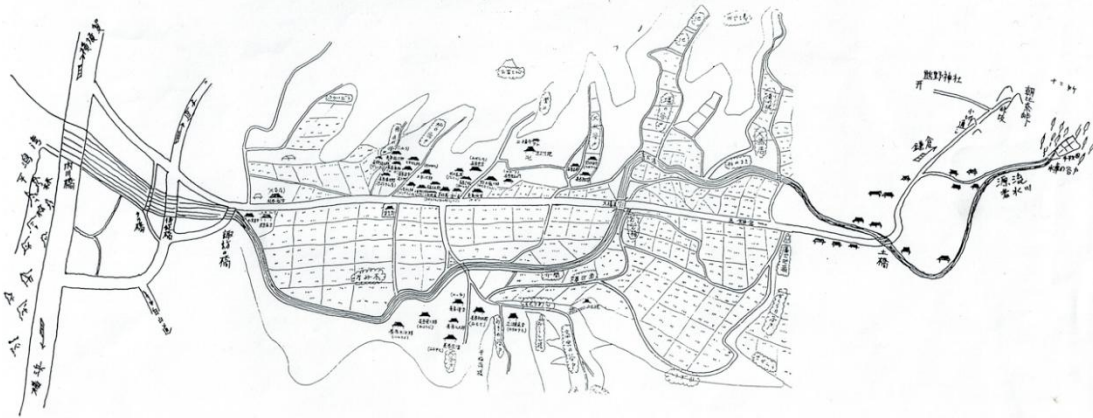
西

東



平成八年二月一八日
廣瀬一雄
(享) 廣瀬陽夫

八景迄
半里



【侍従川の思い出（昭和三年の頃）】 平成七年七月七日 廣瀬一雄

朝比奈峠を水源として、大道（だいどう）を縦断し、川（地名）、三艘（さんぞう）を通り平潟湾に注ぐ清流が侍従川である。その昔、照手（てるて）という高貴な姫が盗賊に追われこの金沢の地で行方知れずになったとき、その乳母の侍従（じじゅう）という人が嘆きのあまり、この川に身を投じたという逸話から侍従川と付けられたという伝説がある。

侍従川は水が清く絶えたことがなく、お陰で大道は大変豊かな村であった。現在は大道中学校のバス停の近くにある、岩に彫られた風化したお地蔵さんは鼻欠地蔵と言ひ、相州（今の鎌倉）と武州（今の金沢）の境に肥えた土地争いの仲裁役として建立されたが、争いがなかなか絶えないのでお地蔵さんが見せしめに、自ら立派な鼻を欠いてしまったと言ひ伝えられている。

この川はうねうねと曲がりくねり、自然の水の流れそのままの姿をしており、両側は大名竹が生い茂り遠くからでも一目で川であることがわかる。

川間のネコ柳が白銀色の芽を吹く頃になると侍従川にも春がくる。川の土手にはツクシ、タンポポ、スマレ、レンゲ、ナズナなど色々な野草でおおわれる。川岸の竹藪ではウグイスが鳴き、セキレイ、カワセミ、カワラヒワ、アオジが飛び交い麦畑ではヒバリが鳴く。

六月になると田圃に水を入れるため大堰が作られる。この頃から川の水が減って子どもたちの川遊びの時期になる。大堰の下の水たまりにはエビ、フナ、ハヤが沢山いて子どもたちはわれ先に網でとる。

川の下流ではかい堀りが始まる。これは水をせき止めて中の水をかい出して魚を捕る方法でウナギ、ドジョウがよくとれる。七月七夕がすぎ夏祭りが近づく頃、夜、川岸でホタル取りが始まる。夜露で足がびっしょりになる。

八月末頃、大池の水が抜かれる。池の中にはコイ、ウナギがいっぱいいいて大人も子どもも夢中になって捕る。これは一年に一度の楽しみな年中行事である。秋になって水が不要になると大堰が開けられ放水する。水の少なくなった川ではウナギ釣りが行われる。

十月頃、大潮になると諏訪の橋の上でハゼ釣りが行われる。10センチくらいのはぜがよく釣れる。このハゼは竹串に刺して焼き、お正月の昆布巻用として保存する。チンチンカエズ（黒鯛の子）や白魚も海から上がってくる。秋も深まり稲刈りも終わる頃、雑木林に北風が吹き抜ける頃、川岸には霜柱が立ち川面は薄氷におおわれて侍従川も冬支度に入る。

【参考資料】

■ 侍従川讃歌に関する資料

【侍従川讃歌プロジェクトリーフレット】

<https://kiongaoka.sakura.ne.jp/blog/wp-content/uploads/2024/01/ji jyuproject.pdf>

【侍従川讃歌ピアノ伴奏譜】

<https://kiongaoka.sakura.ne.jp/blog/wp-content/uploads/2024/01/pianogakufu.pdf>

【侍従川讃歌 A 4 版楽譜】

<https://kiongaoka.sakura.ne.jp/blog/wp-content/uploads/2024/06/nibugassho20240606.pdf>

■ 侍従川に関する資料

【侍従川の再生の記録】

<https://kiongaoka.sakura.ne.jp/blog/wp-content/uploads/2025/11/ji jyugawa20221115.pdf>

【侍従川に伝わる照手姫物語】

<https://kiongaoka.sakura.ne.jp/blog/wp-content/uploads/2025/11/terutehime20251122.pdf>

【侍従川散歩解説（侍従川讃歌の名所）】

<https://kiongaoka.sakura.ne.jp/blog/wp-content/uploads/2025/10/ji jyugawa20251006.pdf>

【昭和 3 年の侍従川の地図】

<https://kiongaoka.sakura.ne.jp/blog/wp-content/uploads/2025/10/ji jyugawachizu.pdf>

歌い継がれるふるさと

侍 従 川 讃 歌 の 誕 生 秘 話

編者 廣瀬隆夫

令和七年十二月十三日 初版 発行

発行所 わきの谷戸

〒236-0035 横浜市金沢区大道 1-14-6

PDF 書籍発刊に際して

地球上にアメーバのような単細胞生命が誕生してから、私たち人間がこうして文章を綴る存在へと進化するまでには、実に三十八億年という気の遠くなるような時間が流れています。

グーテンベルクが活版印刷を発明して以来、書籍は企画・構成・執筆・編集・デザイン・組版・印刷・製本という複雑な工程を経て、ようやく形を成すものでした。当然ながら費用もかかり、限られた人にしか出版という行為は開かれていませんでした。

しかし、私たちはコンピュータという新しい道具を手に入れました。100年の進化の果てに高性能のパソコンとなり、いまや一人ひとりが扱えるまでに小さく、身近な存在となりました。

今では、アイデアさえあれば、ワープロで文章を打ち、校正し、印刷すれば、プリンターのインクと紙代というわずかな費用で一冊の本を作ることができます。この本はパソコンのワードとPDFを使って制作しました。

みなさんも、ぜひご自身で本を作り、世界に一冊だけの「言葉のかたち」を生み出してみてはいかがでしょうか。

